

人と 先 版図 1840' 2878-1/2 1354

銭(王都)大 271520' 64' 86' 2,873'

64'

聖帝(ひじりのみかど)

前記のよう

山口地方、朝鮮半島南端部の一帯を統治する

にすぎなかつた。および薩摩半島南端部

奴国があらた。倭国の東には、倭国と同等の力を誇る

・応神天皇(初代)数代後の応神天皇は、

東国の「豊国」に都を置いて、天下をお治め

になつた。銅鐸文化圏

・倭国の版図(領域)は、いっきよに広が

た。③ 応神朝最終末期の応神天皇は、

都を遷すに及ばず東の地へ今の近畿地方へ

移して日辺日本国の経営に尽力された、

と推察される。続いて「母国(旧出雲国)」に「国譲り」させた。

小林601 井上(上) 341P
炊く 214P
かいて 390P

系譜 2920-1/2 2,874P

矢継早 2223
戦線 1104 2828P-1/2
戦線 1269 2552P-1/2

第1表 (399年? と記す)
2835P-1/2 399年正月3日

仁徳天皇が東の日の日本国(近畿地方)に都を定められた頃(三九九年頃か)海北の朝鮮半島の情勢は緊迫していた。第四十二章へ展開土王陵碑の項。第四十七章へ朝鮮半島の歴史の項において既述。高句麗や新羅との衝突は絶え間なく、戦線から矢継早に、兵の増強。物資の補給が要請されてきた。こうして、九州・中国・近畿地方の全域が次第に疲弊の度を強めていった。仁徳二年(四〇〇年頃か)三月八日、媛命を皇后にお立てになった。皇后は、履中天皇・反正天皇・允恭天皇の母である。仁徳四年(四〇二年頃か)二月六日、徳天皇は群臣に詔し、私は、高台に登って遠くを望み見たが、煙が、国の中にあがっていかなかった。思うに、百姓が非常に貧しくて、家で飯を炊けず、な、からなのではないか。

記(皇)205°
紀上390°

1の主
高 1003°
高 新羅

高 新羅 400年
2828°

2,875°

紀上390°
紀小227°

土人 讀 小村917°
ほめたえさ 紀上390°

私^{わたくし}は、昔^{むかし}、聖王^{せいおう}の御世^{ごせい}に、人々^{ひとびと}が聖王^{せいおう}の徳^{とく}をほめ讃^{たた}えて、日^ひ家毎^{いけごと}に安^{やす}らかに安^{やす}らかなりとて、歌^{うた}を歌^{うた}ったと聞^きいてゐる。

いま、私^{わたくし}が人民^{じんみん}を治^{おさ}めるようになつてから三年^{さんねん}になつた。かし、私^{わたくし}をほめ讃^{たた}える声^{こゑ}は聞^きえず、飯^{いひ}炊^かぐ煙^{けむり}がますます少^{すく}なつた。すなわち、五穀^{ごこく}が稔^{みの}らず、百姓^{ひやくしやう}が窮^{きやう}えしてゐることを知^しつた。

邦^う畿^ち内^つ内^く（畿^き内^{ない}か）とであらうでさえ、なにお物^{もの}が十分^{じふぶん}でないのだから、~~畿外~~諸^{しよ}國^{こく}で

は、いッそう不足^{ふそく}してゐるであらうと仰^{おほ}せられた。

同年^{どうねん}、三月^{さんげつ}二十一日^{にじゅういちにち}に、天皇^{てんかう}は詔^{みことり}して、

「いまより以後^{いしよ}、三年^{さんねん}のあいだ、すべての課^か役^{えき}をやめ、百姓^{ひやくしやう}の苦^{くる}しみを除^のけ」と仰^{おほ}せになつた。（記・紀）

この当時^{このとき}（四〇二年^{しやうに}当時^{とき}）、高句麗^{かうこうり}や新羅^{しんら}と鎬^ほを削^{けず}るため、日^ひ大倭^{やまと}國^{くに}と日^ひ辺^{たつへん}日本^{にほん}國^{くに}の全^{ぜん}ての人々^{ひとびと}が、辛^{しん}苦^くを余儀^{よぎ}なくされてゐたに違^{ちが}ひない。

402° 362° 65° 2880° 3/3 164°
聖表^{せいひょう}があつたという元神^{もとのかみ}天皇^{てんかう}（を指^さすか）

かやぶき
茅葺 460

紀上390P
井上(上) 342
宇治谷田 214

善政 287P-4/5末
同天
288P-1/3 2,876

(づかにおはしり
P 2881P

はん
範 1831P
(牛本)

たの
堪え忍ぶ 1354P
辛抱する。つさをとる
我慢する

●百姓達は、窮乏の生活を強いられ、粗食の
毎日をおくつていたのであろう。

●そこで、仁徳天皇は、

「いまより以後、三年のあいだ、すべての

皇室に係る課役をやめ、百姓の苦しみを

少しでも除くようにせよ」

と仰せられたのであろう、と想察される。

ここに仁徳天皇は、自ら率先して、窮乏を

堪え忍ばれ、從事乎無爲にて、範を示された

■同日の仁徳紀四年三月二十日条に、こう記されている。

「是の日より始めて、仁徳天皇は、御衣服

や履物が破れるまで使用され、御飯やお吸物

が酸味を生じて食べられなくなるまではお捨

てにならず、御自分の御心を削ぎへらし、御

志をつつましやかにしておごらず、天下が治

まるように善政を行なわれた。

宮垣が崩れてもそのままに、茅葺が壊れ

ても葺きなおさず、風雨が隙間から入って御

衣服を濡らした。星の光が壊れたところへ屋

根の朽ちたところから漏れて床の敷物を露

②2803^{P-3/4} ④2794^{P-1/4}
紀上374 3行
耐え生活 380⁶⁵ 2,877^{P-1/2}
1348

天つき
改行

記(墨) 206⁰

にいたし
とある

記

また、

「大殿(皇居)が破れ壊れて、雨漏りかひ

どくなつても、全く修理なさらずで、

でその漏れる雨を受け、御自身は漏れていな

い処へお遷りになり、雨をお避けになつた

ともいう。(記)

では、「宮垣が崩れたり、茅葺が壊れたり

した」という宮は、一体、どこにあつたのだ

ううか。

*新築の大殿(皇居)が早くも壊れたとは考えにくい

もいかりたら、

へた神紀二十二年条、および神紀末年の

四十一一年条に記されていり、難波の大隅宮

で、仁徳天皇は耐え生活をされた

というところなのかも知れない。(要検討)

二十年以上の年月を経た日難波の大隅宮

は、古くなつて、一一宮垣が崩れたり、雨

漏りがたり、といつた状況だったのであ

それも仮りに造った殿舎(仮宮)だったのでなかろうか

心き 小林 24? 不軌 法を守る。404
 教義 98° 14 404 390 不軌 法を守る。404
 5 395 390 不軌 法を守る。404
 2829° 2828°-3/2
 2829° 2828°-3/2
 2829° 2828°-3/2
 2829° 2828°-3/2

四〇四年（仁徳六年か）、倭軍は帯方地方
 へ侵入し、軍を進めていった。
 八年前（三九六年）高句麗の広開土王に
 よって奪われたかつての百濟北部地域を、倭
 国が表に立って奪い返そうとした、と推察さ
 れる。
 広開土王陵碑には、次のように記されてい
 る。
 〔広開土王の永樂〕十四年（四〇四）甲辰
 □倭不軌、侵入帯方界、□□□□石城□連
 船□□□□率□□□□平穰□□□□相遇、王
 幢要截湯刻、倭寇潰敗、斬殺無數
 とある。
 恐らく、
 へ倭国と百濟の連合軍が、広開土王の軍
 に大敗した
 のであろう。（第四十七章入朝
 鮮半島の歴史）の項において既述）

次頁から

同文(書)2555-33(書)2829^P取
古代朝鮮15⁷

2.878^P-1/2

「12」この行決(てと)ブリ
「さ小」
この行下端と 紀上392^P
9⁷ブリ

紀上390^P
井上(書)342^P
宇治(書)215^P

前頁代

●仁徳七年(四〇五か)四月一日 天皇が

高殿の上に登って遙か遠くを一望されると、

人家の煙が盛んに立ちのぼっていた。

その当時、宮殿は朽ち壊れ、府庫はすでに

空になつてゐた。(同年九月条)

■だが、仁徳天皇は、その後さらに辛抱

を続け、宮室の修理を決して許そうと

なかつた。

■倭国と百濟の連合軍は、次の高句麗との戦

闘のために、武器をたくわえ、兵の強化を

図つてゐたのであろう。に相違ない。

●四〇七年(仁徳九年か)、広開土王は、歩

騎五萬もの大軍を派遣し、今の京畿道北部で

鎧と一萬余領の戦利品を得るほどの大勝

した、という。

■広開土王陵碑に、こう述べられてゐる。

「(広開土王の永業)十七年(四〇七)丁

酉(廣開土王の永業)十七年(四〇七)丁

酉(廣開土王の永業)十七年(四〇七)丁

酉(廣開土王の永業)十七年(四〇七)丁

②831^P-1/2 99
注目される

先ほどは1/2
知-出た
②873-1/2
②880-1/2
前述のうに ②873^P-1/2

同文 ②831^P-1/2
199~

2,878^P-3/2

1140^P
↓
②877^P-3/2
4277 OK ②

ヤウジン
大07
1927^P
76320

むかろどう
大07
908^P
910^P
大07 2315

日本に17
カブといふ
は誤りなり
大07
2315^P

大07
2297^P
94の
口

②17
青
など
ある
語

未、教遣歩騎五萬□□□□□□□□
合戦、斬殺蕩盡、所獲鎧鉀一萬餘領、軍資器
械、不可稱數、還破沙溝城・婁城、□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□
とある。

ようするに、
へ百濟と倭国の連合軍は、またもや高句麗
軍に惨敗した✓
と解さる。となのであろう。(第四十七章へ朝
鮮半島の歴史✓の項において既述)

*

■とはいえ、先述の通り、

①広開土王(三七四~四一二)の功績を
した日広開土王陵碑の碑文を見ると、

へ四〇七年に鎧と鉀一萬餘領を得た✓

最後として、
へ四一二)迄の五年間、
たしという記述がない。

というところが特筆される。

異なる点があり、不審に思われる。

原文 ①2880¹/₃ へ407迄高麗と戦った 版16行 紀上392¹/₂

2.879¹/₆

④2831¹/₂ 紀上394¹/₂

②一方、追って述べるように、日本書紀には、

仁徳天皇の十二年（四一〇か）七月三日高麗国が、鉄の盾と、鉄の的を貢上した。云々

と記載されてゐる。

と云つたことから推し測ると、四〇七年、

仁徳天皇が、外交手腕を発揮されて、

高麗国と倭国との間に、戦争終

結の講和が成立したのだらう。

と想像される。（第四十七章へ朝鮮半島の歴史の項において既述）

*

その講和の内容がどんなものであつたかは

と云ふかとして、一々よく我が国に心安まる時が訪れたといえよう。

仁徳十年（四〇八か）十月条に、

はじめて課役を命ぜられて、宮室難波

現代風に

薄飾は装飾、^{しつくりえ}漆喰 ^{仲姫 紀上363^p} 白銀の葺 ^{388^p 注3} ① 1287-1/3 ② 2879-3/6 ③ 2879-4/5 ④ 2879-5/6 ⑤ 2879-6/6 ⑥ 2879-7/6 ⑦ 2879-8/6 ⑧ 2879-9/6 ⑨ 2879-10/6 ⑩ 2879-11/6 ⑪ 2879-12/6 ⑫ 2879-13/6 ⑬ 2879-14/6 ⑭ 2879-15/6 ⑮ 2879-16/6 ⑯ 2879-17/6 ⑰ 2879-18/6 ⑱ 2879-19/6 ⑲ 2879-20/6 ⑳ 2879-21/6 ㉑ 2879-22/6 ㉒ 2879-23/6 ㉓ 2879-24/6 ㉔ 2879-25/6 ㉕ 2879-26/6 ㉖ 2879-27/6 ㉗ 2879-28/6 ㉘ 2879-29/6 ㉙ 2879-30/6 ㉚ 2879-31/6 ㉛ 2879-32/6 ㉜ 2879-33/6 ㉝ 2879-34/6 ㉞ 2879-35/6 ㉟ 2879-36/6 ㊱ 2879-37/6 ㊲ 2879-38/6 ㊳ 2879-39/6 ㊴ 2879-40/6 ㊵ 2879-41/6 ㊶ 2879-42/6 ㊷ 2879-43/6 ㊸ 2879-44/6 ㊹ 2879-45/6 ㊺ 2879-46/6 ㊻ 2879-47/6 ㊼ 2879-48/6 ㊽ 2879-49/6 ㊾ 2879-50/6 ㊿ 2879-51/6 ㏀ 2879-52/6 ㏁ 2879-53/6 ㏂ 2879-54/6 ㏃ 2879-55/6 ㏄ 2879-56/6 ㏅ 2879-57/6 ㏆ 2879-58/6 ㏇ 2879-59/6 ㏈ 2879-60/6 ㏉ 2879-61/6 ㏊ 2879-62/6 ㏋ 2879-63/6 ㏌ 2879-64/6 ㏍ 2879-65/6 ㏎ 2879-66/6 ㏏ 2879-67/6 ㏐ 2879-68/6 ㏑ 2879-69/6 ㏒ 2879-70/6 ㏓ 2879-71/6 ㏔ 2879-72/6 ㏕ 2879-73/6 ㏖ 2879-74/6 ㏗ 2879-75/6 ㏘ 2879-76/6 ㏙ 2879-77/6 ㏚ 2879-78/6 ㏛ 2879-79/6 ㏜ 2879-80/6 ㏝ 2879-81/6 ㏞ 2879-82/6 ㏟ 2879-83/6 ㏠ 2879-84/6 ㏡ 2879-85/6 ㏢ 2879-86/6 ㏣ 2879-87/6 ㏤ 2879-88/6 ㏥ 2879-89/6 ㏦ 2879-90/6 ㏧ 2879-91/6 ㏨ 2879-92/6 ㏩ 2879-93/6 ㏪ 2879-94/6 ㏫ 2879-95/6 ㏬ 2879-96/6 ㏭ 2879-97/6 ㏮ 2879-98/6 ㏯ 2879-99/6 ㏰ 2879-100/6 ㏱ 2879-101/6 ㏲ 2879-102/6 ㏳ 2879-103/6 ㏴ 2879-104/6 ㏵ 2879-105/6 ㏶ 2879-106/6 ㏷ 2879-107/6 ㏸ 2879-108/6 ㏹ 2879-109/6 ㏺ 2879-110/6 ㏻ 2879-111/6 ㏼ 2879-112/6 ㏽ 2879-113/6 ㏾ 2879-114/6 ㏿ 2879-115/6 㐀 2879-116/6 㐁 2879-117/6 㐂 2879-118/6 㐃 2879-119/6 㐄 2879-120/6 㐅 2879-121/6 㐆 2879-122/6 㐇 2879-123/6 㐈 2879-124/6 㐉 2879-125/6 㐊 2879-126/6 㐋 2879-127/6 㐌 2879-128/6 㐍 2879-129/6 㐎 2879-130/6 㐏 2879-131/6 㐐 2879-132/6 㐑 2879-133/6 㐒 2879-134/6 㐓 2879-135/6 㐔 2879-136/6 㐕 2879-137/6 㐖 2879-138/6 㐗 2879-139/6 㐘 2879-140/6 㐙 2879-141/6 㐚 2879-142/6 㐛 2879-143/6 㐜 2879-144/6 㐝 2879-145/6 㐞 2879-146/6 㐟 2879-147/6 㐠 2879-148/6 㐡 2879-149/6 㐢 2879-150/6 㐣 2879-151/6 㐤 2879-152/6 㐥 2879-153/6 㐦 2879-154/6 㐧 2879-155/6 㐨 2879-156/6 㐩 2879-157/6 㐪 2879-158/6 㐫 2879-159/6 㐬 2879-160/6 㐭 2879-161/6 㐮 2879-162/6 㐯 2879-163/6 㐰 2879-164/6 㐱 2879-165/6 㐲 2879-166/6 㐳 2879-167/6 㐴 2879-168/6 㐵 2879-169/6 㐶 2879-170/6 㐷 2879-171/6 㐸 2879-172/6 㐹 2879-173/6 㐺 2879-174/6 㐻 2879-175/6 㐼 2879-176/6 㐽 2879-177/6 㐾 2879-178/6 㐿 2879-179/6 㑀 2879-180/6 㑁 2879-181/6 㑂 2879-182/6 㑃 2879-183/6 㑄 2879-184/6 㑅 2879-185/6 㑆 2879-186/6 㑇 2879-187/6 㑈 2879-188/6 㑉 2879-189/6 㑊 2879-190/6 㑋 2879-191/6 㑌 2879-192/6 㑍 2879-193/6 㑎 2879-194/6 㑏 2879-195/6 㑐 2879-196/6 㑑 2879-197/6 㑒 2879-198/6 㑓 2879-199/6 㑔 2879-200/6 㑕 2879-201/6 㑖 2879-202/6 㑗 2879-203/6 㑘 2879-204/6 㑙 2879-205/6 㑚 2879-206/6 㑛 2879-207/6 㑜 2879-208/6 㑝 2879-209/6 㑞 2879-210/6 㑟 2879-211/6 㑠 2879-212/6 㑡 2879-213/6 㑢 2879-214/6 㑣 2879-215/6 㑤 2879-216/6 㑥 2879-217/6 㑦 2879-218/6 㑧 2879-219/6 㑨 2879-220/6 㑩 2879-221/6 㑪 2879-222/6 㑫 2879-223/6 㑬 2879-224/6 㑭 2879-225/6 㑮 2879-226/6 㑯 2879-227/6 㑰 2879-228/6 㑱 2879-229/6 㑲 2879-230/6 㑳 2879-231/6 㑴 2879-232/6 㑵 2879-233/6 㑶 2879-234/6 㑷 2879-235/6 㑸 2879-236/6 㑹 2879-237/6 㑺 2879-238/6 㑻 2879-239/6 㑼 2879-240/6 㑽 2879-241/6 㑾 2879-242/6 㑿 2879-243/6 㒀 2879-244/6 㒁 2879-245/6 㒂 2879-246/6 㒃 2879-247/6 㒄 2879-248/6 㒅 2879-249/6 㒆 2879-250/6 㒇 2879-251/6 㒈 2879-252/6 㒉 2879-253/6 㒊 2879-254/6 㒋 2879-255/6 㒌 2879-256/6 㒍 2879-257/6 㒎 2879-258/6 㒏 2879-259/6 㒐 2879-260/6 㒑 2879-261/6 㒒 2879-262/6 㒓 2879-263/6 㒔 2879-264/6 㒕 2879-265/6 㒖 2879-266/6 㒗 2879-267/6 㒘 2879-268/6 㒙 2879-269/6 㒚 2879-270/6 㒛 2879-271/6 㒜 2879-272/6 㒝 2879-273/6 㒞 2879-274/6 㒟 2879-275/6 㒠 2879-276/6 㒡 2879-277/6 㒢 2879-278/6 㒣 2879-279/6 㒤 2879-280/6 㒥 2879-281/6 㒦 2879-282/6 㒧 2879-283/6 㒨 2879-284/6 㒩 2879-285/6 㒪 2879-286/6 㒫 2879-287/6 㒬 2879-288/6 㒭 2879-289/6 㒮 2879-290/6 㒯 2879-291/6 㒰 2879-292/6 㒱 2879-293/6 㒲 2879-294/6 㒳 2879-295/6 㒴 2879-296/6 㒵 2879-297/6 㒶 2879-298/6 㒷 2879-299/6 㒸 2879-300/6 㒹 2879-301/6 㒺 2879-302/6 㒻 2879-303/6 㒼 2879-304/6 㒽 2879-305/6 㒾 2879-306/6 㒿 2879-307/6 㓀 2879-308/6 㓁 2879-309/6 㓂 2879-310/6 㓃 2879-311/6 㓄 2879-312/6 㓅 2879-313/6 㓆 2879-314/6 㓇 2879-315/6 㓈 2879-316/6 㓉 2879-317/6 㓊 2879-318/6 㓋 2879-319/6 㓌 2879-320/6 㓍 2879-321/6 㓎 2879-322/6 㓏 2879-323/6 㓐 2879-324/6 㓑 2879-325/6 㓒 2879-326/6 㓓 2879-327/6 㓔 2879-328/6 㓕 2879-329/6 㓖 2879-330/6 㓗 2879-331/6 㓘 2879-332/6 㓙 2879-333/6 㓚 2879-334/6 㓛 2879-335/6 㓜 2879-336/6 㓝 2879-337/6 㓞 2879-338/6 㓟 2879-339/6 㓠 2879-340/6 㓡 2879-341/6 㓢 2879-342/6 㓣 2879-343/6 㓤 2879-344/6 㓥 2879-345/6 㓦 2879-346/6 㓧 2879-347/6 㓨 2879-348/6 㓩 2879-349/6 㓪 2879-350/6 㓫 2879-351/6 㓬 2879-352/6 㓭 2879-353/6 㓮 2879-354/6 㓯 2879-355/6 㓰 2879-356/6 㓱 2879-357/6 㓲 2879-358/6 㓳 2879-359/6 㓴 2879-360/6 㓵 2879-361/6 㓶 2879-362/6 㓷 2879-363/6 㓸 2879-364/6 㓹 2879-365/6 㓺 2879-366/6 㓻 2879-367/6 㓼 2879-368/6 㓽 2879-369/6 㓾 2879-370/6 㓿 2879-371/6 㔀 2879-372/6 㔁 2879-373/6 㔂 2879-374/6 㔃 2879-375/6 㔄 2879-376/6 㔅 2879-377/6 㔆 2879-378/6 㔇 2879-379/6 㔈 2879-380/6 㔉 2879-381/6 㔊 2879-382/6 㔋 2879-383/6 㔌 2879-384/6 㔍 2879-385/6 㔎 2879-386/6 㔏 2879-387/6 㔐 2879-388/6 㔑 2879-389/6 㔒 2879-390/6 㔓 2879-391/6 㔔 2879-392/6 㔕 2879-393/6 㔖 2879-394/6 㔗 2879-395/6 㔘 2879-396/6 㔙 2879-397/6 㔚 2879-398/6 㔛 2879-399/6 㔜 2879-400/6 㔝 2879-401/6 㔞 2879-402/6 㔟 2879-403/6 㔠 2879-404/6 㔡 2879-405/6 㔢 2879-406/6 㔣 2879-407/6 㔤 2879-408/6 㔥 2879-409/6 㔦 2879-410/6 㔧 2879-411/6 㔨 2879-412/6 㔩 2879-413/6 㔪 2879-414/6 㔫 2879-415/6 㔬 2879-416/6 㔭 2879-417/6 㔮 2879-418/6 㔯 2879-419/6 㔰 2879-420/6 㔱 2879-421/6 㔲 2879-422/6 㔳 2879-423/6 㔴 2879-424/6 㔵 2879-425/6 㔶 2879-426/6 㔷 2879-427/6 㔸 2879-428/6 㔹 2879-429/6 㔺 2879-430/6 㔻 2879-431/6 㔼 2879-432/6 㔽 2879-433/6 㔾 2879-434/6 㔿 2879-435/6 㕀 2879-436/6 㕁 2879-437/6 㕂 2879-438/6 㕃 2879-439/6 㕄 2879-440/6 㕅 2879-441/6 㕆 2879-442/6 㕇 2879-443/6 㕈 2879-444/6 㕉 2879-445/6 㕊 2879-446/6 㕋 2879-447/6 㕌 2879-448/6 㕍 2879-449/6 㕎 2879-450/6 㕏 2879-451/6 㕐 2879-452/6 㕑 2879-453/6 㕒 2879-454/6 㕓 2879-455/6 㕔 2879-456/6 㕕 2879-457/6 㕖 2879-458/6 㕗 2879-459/6 㕘 2879-460/6 㕙 2879-461/6 㕚 2879-462/6 㕛 2879-463/6 㕜 2879-464/6 㕝 2879-465/6 㕞 2879-466/6 㕟 2879-467/6 㕠 2879-468/6 㕡 2879-469/6 㕢 2879-470/6 㕣 2879-471/6 㕤 2879-472/6 㕥 2879-473/6 㕦 2879-474/6 㕧 2879-475/6 㕨 2879-476/6 㕩 2879-477/6 㕪 2879-478/6 㕫 2879-479/6 㕬 2879-480/6 㕭 2879-481/6 㕮 2879-482/6 㕯 2879-483/6 㕰 2879-484/6 㕱 2879-485/6 㕲 2879-486/6 㕳 2879-487/6 㕴 2879-488/6 㕵 2879-489/6 㕶 2879-490/6 㕷 2879-491/6 㕸 2879-492/6 㕹 2879-493/6 㕺 2879-494/6 㕻 2879-495/6 㕼 2879-496/6 㕽 2879-497/6 㕾 2879-498/6 㕿 2879-499/6 㖀 2879-500/6 㖁 2879-501/6 㖂 2879-502/6 㖃 2879-503/6 㖄 2879-504/6 㖅 2879-505/6 㖆 2879-506/6 㖇 2879-507/6 㖈 2879-508/6 㖉 2879-509/6 㖊 2879-510/6 㖋 2879-511/6 㖌 2879-512/6 㖍 2879-513/6 㖎 2879-514/6 㖏 2879-515/6 㖐 2879-516/6 㖑 2879-517/6 㖒 2879-518/6 㖓 2879-519/6 㖔 2879-520/6 㖕 2879-521/6 㖖 2879-522/6 㖗 2879-523/6 㖘 2879-524/6 㖙 2879-525/6 㖚 2879-526/6 㖛 2879-527/6 㖜 2879-528/6 㖝 2879-529/6 㖞 2879-530/6 㖟 2879-531/6 㖠 2879-532/6 㖡 2879-533/6 㖢 2879-534/6 㖣 2879-535/6 㖤 2879-536/6 㖥 2879-537/6 㖦 2879-538/6 㖧 2879-539/6 㖨 2879-540/6 㖩 2879-541/6 㖪 2879-542/6 㖫 2879-543/6 㖬 2879-544/6 㖭 2879-545/6 㖮 2879-546/6 㖯 2879-547/6 㖰 2879-548/6 㖱 2879-549/6 㖲 2879-550/6 㖳 2879-551/6 㖴 2879-552/6 㖵 2879-553/6 㖶 2879-554/6 㖷 2879-555/6 㖸 2879-556/6 㖹 2879-557/6 㖺 2879-558/6 㖻 2879-559/6 㖼 2879-560/6 㖽 2879-561/6 㖾 2879-562/6 㖿 2879-563/6 㗀 2879-564/6 㗁 2879-565/6 㗂 2879-566/6 㗃 2879-567/6 㗄 2879-568/6 㗅 2879-569/6 㗆 2879-570/6 㗇 2879-571/6 㗈 2879-572/6 㗉 2879-573/6 㗊 2879-574/6 㗋 2879-575/6 㗌 2879-576/6 㗍 2879-577/6 㗎 2879-578/6 㗏 2879-579/6 㗐 2879-580/6 㗑 2879-581/6 㗒 2879-582/6 㗓 2879-583/6 㗔 2879-584/6 㗕 2879-585/6 㗖 2879-586/6 㗗 2879-587/6 㗘 2879-588/6 㗙 2879-589/6 㗚 2879-590/6 㗛 2879-591/6 㗜 2879-592/6 㗝 2879-593/6 㗞 2879-594/6 㗟 2879-595/6 㗠 2879-596/6 㗡 2879-597/6 㗢 2879-598/6 㗣 2879-599/6 㗤 2879-600/6 㗥 2879-601/6 㗦 2879-602/6 㗧 2879-603/6 㗨 2879-604/6 㗩 2879-605/6 㗪 2879-606/6 㗫 2879-607/6 㗬 2879-608/6 㗭 2879-609/6 㗮 2879-610/6 㗯 2879-611/6 㗰 2879-612/6 㗱 2879-613/6 㗲 2879-614/6 㗳 2879-615/6 㗴 2879-616/6 㗵 2879-617/6 㗶 2879-618/6 㗷 2879-619/6 㗸 2879-620/6 㗹 2879-621/6 㗺 2879-622/6 㗻 2879-623/6 㗼 2879-624/6 㗽 2879-625/6 㗾 2879-626/6 㗿 2879-627/6 㘀 2879-628/6 㘁 2879-629/6 㘂 2879-630/6 㘃 2879-631/6 㘄 2879-632/6 㘅 2879-633/6 㘆 2879-634/6 㘇 2879-635/6 㘈 2879-636/6 㘉 2879-637/6 㘊 2879-638/6 㘋 2879-639/6 㘌 2879-640/6 㘍 2879-641/6 㘎 2879-642/6 㘏 2879-643/6 㘐 2879-644/6 㘑 2879-645/6 㘒 2879-646/6 㘓 2879-647/6 㘔 2879-648/6 㘕 2879-649/6 㘖 2879-650/6 㘗 2879-651/6 㘘 2879-652/6 㘙 2879-653/6 㘚 2879-654/6 㘛 2879-655/6 㘜 2879-656/6 㘝 2879-657/6 㘞 2879-658/6 㘟 2879-659/6 㘠 2879-660/6 㘡 2879-661/6 㘢 2879-662/6 㘣 2879-663/6 㘤 2879-664/6 㘥 2879-665/6 㘦 2879-666/6 㘧 2879-667/6 㘨 2879-668/6 㘩 2879-669/6 㘪 2879-670/6 㘫 2879-671/6 㘬 2879-672/6 㘭 2879-673/6 㘮 2879-674/6 㘯 2879-675/6 㘰 2879-676/6 㘱 2879-677/6 㘲 2879-678/6 㘳 2879-679/6 㘴 2879-680/6 㘵 2879-681/6 㘶 2879-682/6 㘷 2879-683/6 㘸 2879-684/6 㘹 2879-685/6 㘺 2879-686/6 㘻 2879-687/6 㘼 2879-688/6 㘽 2879-689/6 㘾 2879-690/6 㘿 2879-691/6 㙀 2879-692/6 㙁 2879-693/6 㙂 2879-694/6 㙃 2879-695/6 㙄 2879-696/6 㙅 2879-697/6 㙆 2879-698/6 㙇 2879-699/6 㙈 2879-700/6 㙉 2879-701/6 㙊 2879-702/6 㙋 2879-703/6 㙌 2879-704/6 㙍 2879-705/6 㙎 2879-706/6 㙏 2879-707/6 㙐 2879-708/6 㙑 2879-709/6 㙒 2879-710/6 㙓 2879-711/6 㙔 2879-712/6 㙕 2879-713/6 㙖 2879-714/6 㙗 2879-715/6 㙘 2879-716/6 㙙 2879-717/6 㙚 2879-718/6 㙛 2879-719/6 㙜 2879-720/6 㙝 2879-721/6 㙞 2879-722/6 㙟 2879-723/6 㙠 2879-724/6 㙡 2879-725/6 㙢 2879-726/6 㙣 2879-727/6 㙤 2879-728/6 㙥 2879-729/6 㙦 2879-730/6 㙧 2879-731/6 㙨 2879-732/6 㙩 2879-733/6 㙪 2879-734/6 㙫 2879-735/6 㙬 2879-736/6 㙭 2879-737/6 㙮 2879-738/6 㙯 2879-739/6 㙰 2879-740/6 㙱 2879-741/6 㙲 2879-742/6 㙳 2879-743/6 㙴 2879-744/6 㙵 2879-745/6 㙶 2879-746/6 㙷 2879-747/6 㙸 2879-748/6 㙹 2879-749/6 㙺 2879-750/6 㙻 2879-751/6 㙼 2879-752/6 㙽 2879-753/6 㙾 2879-754/6 㙿 2879-755/6 㚀 2879-756/6 㚁 2879-757/6 㚂 2879-758/6 㚃 2879-759/6 㚄 2879-760/6 㚅 2879-761/6 㚆 2879-762/6 㚇 2879-763/6 㚈 2879-764/6 㚉 2879-765/6 㚊 2879-766/6 㚋 2879-767/6 㚌 2879-768/6 㚍 2879-769/6 㚎 2879-770/6 㚏 2879-771/6 㚐 2879-772/6 㚑 2879-773/6 㚒 2879-774/6 㚓 2879-775/6 㚔 2879-776/6 㚕 2879-777/6 㚖 2879-778/6 㚗 2879-779/6 㚘 2879-780/6 㚙 2879-781/6 㚚 2879-782/6 㚛 2879-783/6 㚜 2879-784/6 㚝 2879-785/6 㚞 2879-786/6 㚟 2879-787/6 㚠 2879-788/6 㚡 2879-789/6 㚢 2879-790/6 㚣 2879-791/6 㚤 2879-792/6 㚥 2879-793/6 㚦 2879-794/6 㚧 2879-795/6 㚨 2879-796/6 㚩 2879-797/6 㚪 2879-798/6 㚫 2879-799/6 㚬 2879-800/6 㚭 2879-801/6 㚮 2879-802/6 㚯 2879-803/6 㚰 2879-804/6 㚱 2879-805/6 㚲 2879-806/6 㚳 2879-807/6 㚴 2879-808/6 㚵 2879-809/6 㚶 2879-810/6 㚷 2879-811/6 㚸 2879-812/6 㚹 2879-813/6 㚺 2879-814/6 㚻 2879-815/6 㚼 2879-816/6 㚽 2879-817/6 㚾 2879-818/6 㚿 2879-819/6 㞀 2879-820/6 㞁 2879-821/6 㞂 2879-822/6 㞃 2879-823/6 㞄 2879-824/6 㞅 2879-825/6 㞆 2879-826/6 㞇 2879-827/6 㞈 2879-828/6 㞉 2879-829/6

2,879^p - 3/6

大船 2877^p - 1/2 4行
宮垣 2876^p - 1/2 4行
新築

紀上 388^p
記(四) 204^p

仁徳四年以前へ十三二行

・仁徳天皇は、難波の高津宮を質素にし、庶民を優

先さされたのではなからうか。

また、仁徳紀元年条におもひ仁徳記冒頭にも

難波の高津宮の記載がある。

しかし、新築したばかりの難波の高津宮

か、ほんの数年後の仁徳四年(287)十年に、早く

も茅葺が壊れて雨漏りし、宮垣が崩れたとは納

得にくくい(既述)

・難波の高津宮は、実は、仁徳十年(475)回

の八年頃(477)に造られたものの下(1)記紀編

纂者が、後代の結果を早々と述べたのだらう

と思われろ。

see! 同文 2658-3/5 2,879-4/6

1286-2/7 同文 28

岩波書店 三九二頁、注九、十一参照

■なお

へ古来、~~我國~~では、宮垣や室屋を白く塗つ

ていた。しかし、~~仁徳~~天皇は、あえて塗装せ

ず、白木のままにされた。まだまだ心を引き締め

ということが分る。(第十八章へ宮城の項

において既述)

■もつとも、仁徳天皇の口難波の高津宮Bが

どこに作られたのかについては、―――現在

のところがまだ確認されていらない。

天王寺

高等

■大阪市東区餌差町の高津高等学校校庭に宮址

の碑石が建てられているが、~~高津~~ 確定な根拠があ

るわけではない、という。(「日本書紀」上)

日本古典文学大系、三八九頁、注一四参照。

第四十三章へ天稚彦の項において既述)

*

2654

■仁徳紀十年十月条に、

「仁徳天皇を」いまに至るまで、~~聖帝~~

と申し上げる

と記されているばかりでなく、仁徳記におい

自ら率先して堪え忍び下善政を行なわれ下しかる

ても同様の記載があり、
後に国中を見たまへば、国に烟満てり。
かれ、人民富めりとして、今はと課役を科せ
たまひき。ここをちて、百姓栄えて、役使
に苦しびざりき。かれ、その御世を称へて、
聖の帝の世とまをすし
とある。
また予め述べるに、仁徳紀の末尾にこ
う記されている。
「天皇は、朝早く起きられ、夜遅く寝られ
て、賦役を軽くし、租税を軽減し人民を
束縛から解き、徳をいし、恵みを施し困
窮を救われた。死を弔い、疾病を慰問され、
孤孀へみなごとやめを養われた。その
ため、政令がよく行なわれて、天下は太平で
あった。二十余年も事が起らなかったし
とある。
あるいは、
高句麗と倭国との間に和平が成立したと
思われる四十七年から、四十七年の仁

2.879^P - 6/6

あかけ 足掛 元33^P 前後の端数を1と数える。

徳天皇崩御(記)迄の二十年間、つまり、
足かけ二十一年間、事が起らなかった。
という。香のかわ知れない。
偉大な功績を誉めたうえで、仁徳天皇を
帝と尊称するのかわ知れない。

*

仁徳4年 1613
放佚 2009
先帝 紀上385, 382

仁徳4年 2874
仁徳4年 2876
2,880P-1/3

2881-1/3 2879-1/5
2879 紀上392
2873-1/2
2878-1/2
922
讀称 ほめたえり

先帝の度外れた放埒悪政により乱れてしま

すなわち、仁徳天皇は、仁徳四年からずっと耐えの時を過され、一年後の仁徳十年になつて甫めて課役を科せられ、宮室をお造りになつた。そこで、仁徳天皇を聖帝と称讃する。この「仁徳」というのは、一体何故、仁徳天皇はそんなに長い間、自らすすんで貧窮の生活を続けられたのであろうか。

さて、仁徳天皇を聖帝と讃称するといふことについて、改めて検討してみたい。先ほ述べたように、仁徳紀十年十月条に、「甫めて課役を科せて、宮室を構造する。是に、百姓、領されずして、老を扶け幼を携へ、材を運び簣を負ふ。日夜と問はず。力を竭して競ひ作る。是を以て、未だ幾時を経ずして、宮室悉に成りぬ。故、今までに聖帝と稱めまうす」とある。

決て到底 2822-3/4 2873 24 再興 再興すること
2873 24 再興 再興すること
2873 24 再興 再興すること

2,880^{P-2}

ひんがし 2875-19 紀上 211

った世を、仁徳天皇が再興された。そで、
仁徳天皇を聖帝と称す

とでもいうのだろうか。
いや、決してそういう訳ではなさそうであ

る。
父帝、応神天皇が愚昧であつたとも、
に倭国が荒廃してしまつたとも、考えにくい

母とのように思われる。

応神天皇（ハ幡神）は、日本各地の数多
くの神社において祭神として祀られ、あつく

敬われてゐる（第37表参照）
応神天皇が為し遂げられた

であつた、と考えねばなるまい。
また、応神天皇は、幼少より聡明で、もの

ごとを深く慮くまで見とおされ、動作進退（たち
いふるまい）に不思議な聖表があつたという。

（応神即位前記）
その応神天皇が、炊事の煙も立たないまで

に倭国全土を衰退させてしまわれた、などと
はとも考えられない。

甚くこの良う行

表内は、
 全てゴチに下さい
 1頁全面にゴチを掲載下さい。
 1509 ⇔ 第37表 神社分類表

②地域ごとに多い信仰

北海道・東北	八幡・伊勢・稲荷・熊野
関東	八幡・伊勢・稲荷・熊野
北陸・甲信	八幡・伊勢・諏訪・白山
東海	八幡・伊勢・白山
近畿	八幡・春日・稻荷
中国	八幡・天神・荒神
四国	八幡・天神・山神
九州	八幡・天神・熊野・貴船

①信仰別の神社数

信仰名	神社数
① 八幡	7817
② 伊勢	4425
③ 天神	3953
④ 稲荷	2970
⑤ 熊野	2693
⑥ 諏訪	2616
⑦ 祇園	2299
⑧ 白山	1893
⑨ 日吉	1724
⑩ 山神	1571
⑪ 春日	1072
⑫ 愛宕	872
⑬ 三島・大山祇	704
⑭ 鹿島	604
⑮ 金毘羅	601
⑯ 住吉	591
⑰ 大歳	548
⑱ 厳島	530
⑲ 貴船	463
⑳ 香取	420
㉑ えびす	408
㉒ 浅間	397
㉓ 秋葉	362
㉔ 荒神	317
㉕ 賀茂神	277
㉖ 水神	277

1509
 神社本庁の『全国神社祭祀系礼総合調査』
 (1995年)のデータを用いた。

2,880 p 3/3

・八幡神社、八幡宮、若宮神社、若宮八幡神社などは、
 名前から見て同じ八幡信仰とした。
 ・神明社、皇大神社、天祖神社、大神宮などは、伊勢
 信仰に取リ継がれた。
 ・天満神社、天神社、菅原神社、北野神社などは、
 天神信仰に一括した。

* 約79,000の神社を、祭祀に注目して分類し、分布を
 明らかにする研究を、国学院大学の岡田壮司教授(神道史)
 さんのリーダーシップでめた。

* 八幡神を祭る神社が、ずば抜けて多く、7817社(約1割)
 もあることが分かる。

『朝日新聞』平成19年(2007)2月22日付 <神社分類> 参照
 1309 34

かうどつ
主 元 268
に 候 ありて

元 1582
無為 2100
何事 ありて

2,881^P

課役 366^P
紀上390^P

紀上390^P 未
2876^P

紀上390^P 22
2875^P

紀上390^P 85^P

■では、仁徳四年以前から、仁徳十年頃迄の
長期間にわたって、
五穀は登らず、大規模な飢饉が邦畿之内
や畿外諸國を襲っていた。
というところなのであろうか。(仁徳四年正月条参照)
しかし、もしもそうなら、
從事乎無為して何もせず、ただただ天下
が自然に治まるのを待つのでなく、難局の
突破に尽力する方が道理にかなっている。
ように思われる。
また、
采心に課役へ仕事を割り当てることを
止めるのでなく、課役を科して治山治水
を行ない、國を豊かにしようとする。このそ
王道へ仁徳を本とする政道である。
とも思われる。
無為の政治を行ない、ひたすら静かにし、窮
乏の生活を長期間にわたって続けられた仁徳
天皇の文とを聖帝と称す、というのには理
解ににくい。
■たぶん、
記紀の文面に表われていない理由

2874^P
-2/5
159

2879^P
-1/5
195

めぼ
和睦 2381P
なかなあり、講和

ふりふき
不要 1962P

2.882¹/₄ ㊦2904°

庫りた
㊦2822¹/₄
155

かあるに相違ないや

つまり、

へ日古事記や日日本書紀の表面的な記

述からは伺い知ることの出来ない理由によつ

て、仁徳天皇は日聖帝と稱めたたえられた

のであろう✓

と想到される。

定かでないが、
仁徳天

皇は、

①新しく倭国に組み込まれた日日迎日本国

へ近畿・中国地方の人々の心を、
先帝示

神天皇に引き続いて慰撫された。

②海北の朝鮮半島の戦線への兵の派遣や、各

種の物資の供給を最優先され、

皇室に係る不急の課税を悉くやめて、自

らのことは全くかえり見られなかった。

③一方、高句麗との泥沼化する戦局を打開

する為、和平交渉に腐心され、

に、和睦を樹立されて、
我国に平穩の時をも

たらされた

隠されている理由

㊦2813¹/₂
1949

2,882^P - 3/4

② 2879^P

のであろう。

■ そりで、

へん々は、仁徳天皇 ^{（みこと）} を、いまに至る

まで、日 ^{（ひ）} 聖帝 ^{（せい）} とたえ申し上げる ^{（い）} の ^{（だ）} であらう

う ✓

と拝察される。

米

珠(2) 2880²-3/4 457

2,882²-3/4

字アキ 「新ヤ」(1)-397²

すでに述べた通り、
① 周の武王は、殷を滅ぼした後に、殷の王
子武庚を元の故地に封じた。
② 呉王夫差は、越王勾践を殺さなかった。
③ 神功皇后は、新羅王の縛を解いて馬飼いに
にされた。
という。第二章へ倭人傳の伝統的な温情政
策✓において既述。
戦勝し、支配権を握った時こそ、最も重要
である。
勝った勢いにまかせ、権勢をふるい、
たら、植民地政策を、異文化の反感を招くよう
なものであり、到底長続きしない。
念は増幅してゆき、互いの憎悪の
念は増幅してゆき、悪感情を修復する
のは、至難の業である。
悪感情を修復する

H30(2018)7.23(月)~7.24(4回)

善政 2819-45 概

小林 漢和
統 758

政 449

治 560

理念
電 フラトン

ス
人
ハ
心

又
ハ
前
頁
5
行

正
④ 2907-18 武 烈 天皇で絶え

2,882²-4/4
善政 2819-45 概

つまり ④ 2882²-1/4 2行

ともあれ、厚かれ早かれ、破綻のとき来る
に違いない。
往古の倭人達は、
「被支配者達の心情に思いを寄せ、善政を
はかつてはじめて、人民の心を掌握できる」
そして、ひいては国家が安泰になる
と考えていたのではなかろうか。
「察するところ、
「国の発展・安寧・長久を願うならば」
新たに有った土地の人々の為の誠意ある統治を他掛けなければならぬ」
という政治意識が、
「連綿と受け継がれていったのだ
ろう」と思われる。
更に、
仁徳天皇の王統は、
武烈天皇で絶え
る。
「実は、このことか、
仁徳天皇を日聖帝と
たたえて、最も大きな要因であろう。」
追

④ 2822²-1/4 14
相違ない

初瀬川
大阪府のT史
1897年

は  こ
 現在の状況と異なり  泊瀬川の
 上町台地と生駒小  下流の大河和川

店 赤穂義士
元禄15年12月14日

2,883^P-3/6

2884^P-3/12
2884^P-3/12
2884^P-3/12

次頁
から、

という。ハ「大阪府の歴史」藤本篤、山川出版社、一八九七一九三頁参照)

第369 図へ大和川つけかえ地図

おこなわれた

その年の十月には全工事が完了して、通水が

七年(一七〇四)二月のことであり、

事が着手されたのは、江戸時代中期の元禄十

「大和川を現在の流水のように変更する工

事」が着手されたのは、江戸時代中期の元禄十

七年(一七〇四)二月のことであり、

「大和川を現在の流水のように変更する工

事」が着手されたのは、江戸時代中期の元禄十

七年(一七〇四)二月のことであり、

「大和川を現在の流水のように変更する工

④ 2884¹ - 1/4 図 参考 (川) な (1)

2,883¹ - 3/6

④ 2884¹ - 3/4

前頁

伸びる半島状であつて、――この台地には
目立つた川も流れていないから、難波高津
宮の宮廷生活に必要な水の確保すること
非常に困難だったのであらう。(第371図参照)
そこで、日南の水(大和川)の水を引い
てくることか企図されたものと思われ
る。
それは、
「南の水(大和川)から取水され、
難波高津宮の北の郊原を西へ向ひ、大阪湾へ
注ぐようにされた」
と考えられる。堀江は、一体、どのよう
な経路をとつて流れていったのだろうか。
もし、かいたら、
へ日南の水(大和川)のやや上流域で取
水された水が、上野台地の東の縁部沿いに

ということよのかわりない

こと
いたのたうか 前頁17行

⑤ 2879^P-1/5

2,883^P-4/6

北流し、日難波高津宮^{（なにはのたかつのみや）}の北の郊原を横ぎつて大阪湾へ注ぐように、長大な日堀^{（ほり）}が掘ら

れた。このことも知らない（第371図参照）

① 仁徳天皇が日難波高津宮^{（なにはのたかつのみや）}の建設を思い定

められたころから、大和川の水を引いてく

構想が練られ、——そして、溝が掘り進め

られていったのたう。

② 仁徳十年（四〇八か）十月の宮室（難波高

津宮）造営の頃には、すでに、——大和川

から取り入れられた水が、都付近まで流れ

てきて、日難波の入江の西岸^{（せいがん）}へ注いでい

たのではなからうか。（上町台地の東岸）

③ とはいえ、上町台地北端部の水不足を解消

する為、さらに溝が北へ延長されたのであ

らう。

④ そして、仁徳十一年（四〇九か）十月

日難波高津宮^{（なにはのたかつのみや）}の北の郊原を掘り、日南の水

（大和川）を引いて、西の海（大阪湾）へ注

ぐと想像される。

大邑县区分地图帖 ⑦阿郭野区
瓮内路川堂院图 ⑧ 2883-3/6 大和川变

ト
ル

②2883^P 北端部へ水を引く
-4/6 15分

2,883^P-6/6

自然の川でなす

②2883^P-3/2に貼付
付録のファイル

②2884^P-3/4に移す

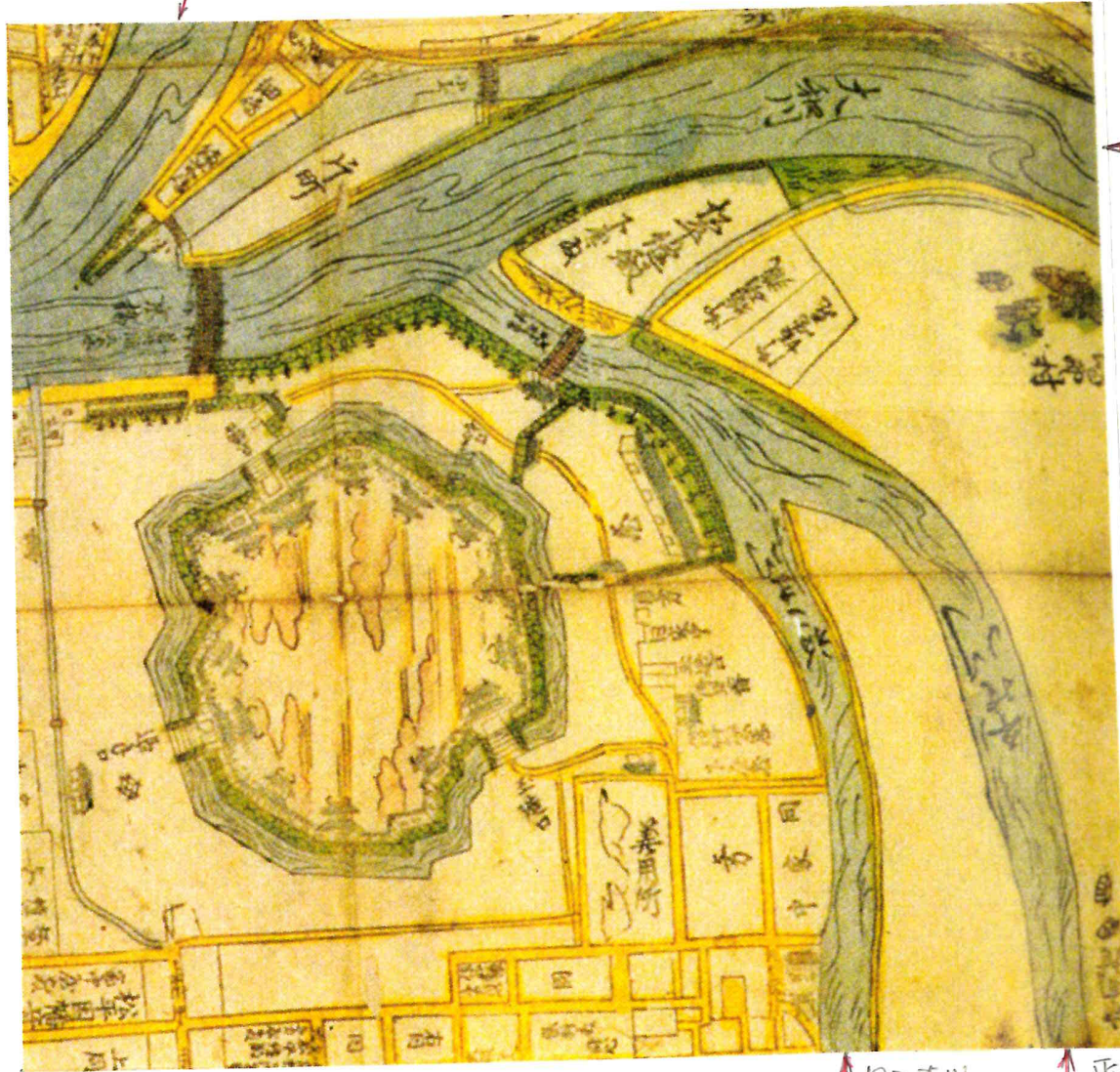
(および扶余系敷民の子孫達)

① 日南の水は (旧大和川) から取水されてい
たものと、日堀江に、どのような経路を
とって流れていったのか、
② 北の郊原を西流したという溝はどこにあり
大阪湾のどのあたりに注いでいったのか、
などといったことについては分らない。
と言われるように、
へ水は、高い所から、より低いところへ向
かって、いつに短絡的に流水下る✓
ものである。堀江(旧猫間川)は上町台地の東の縁に沿って
ほぼ真直ぐ北上して、難波宮宮内へ
自然の川だとは考えられない。到底
の給水の為、人工的に掘られたのだろうと
想到される。
ともあれ、
へかつて、白川の上流域で取水し、合
志原へ導いたほどの高度な水利技術をもつ倭
人達にとつて、日南の水は (旧大和川)

よど 淀川 2,884^p 1/12

- ・カラー
- ・左頁上半分に大きく掲載下さい。

* 著作権許諾は不要だと思います。



やまと 大和川

ねこま川

平野川

江戸時代初期当時

1409

第367回 17世紀末の大阪城近傍図

1309 歴史群像シリーズ 日本城下町(2)『大坂、大阪』学習研究社 2008年5月12日発行 21頁参照

1209

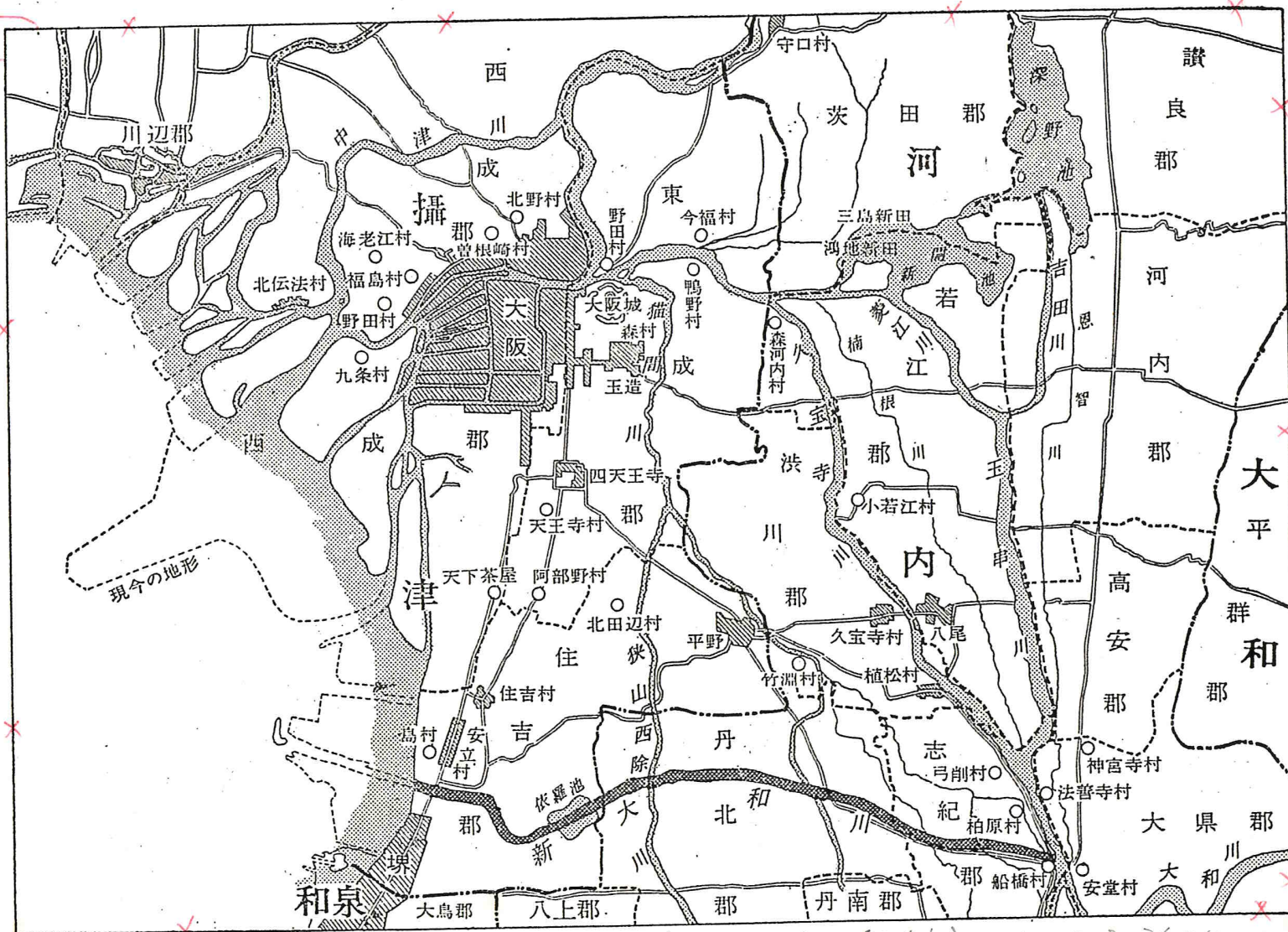
大阪城の東北あたりで、ねこま川と平野川が合流していた。
ねこま川は、大阪城の濠の役目を果たしていた。『おたけの15 大阪(上) 岡本良一 昭和60年11月30日発行 25頁参照』

166^p

2884^p-2/12

- ・別紙(次頁)のように訂正下さい。
- ・右頁上半分に、はみ出て、限定一杯大々掲載下さい。

枠
トル



注釈ナシ

1404 第368図 (第169図と同一)

大和川つけかえ地図 (1704年) ← 南2883^p-3/684

2883-2/6

1304 『大阪府の歴史』 藤本篤 山川出版社 191頁参照

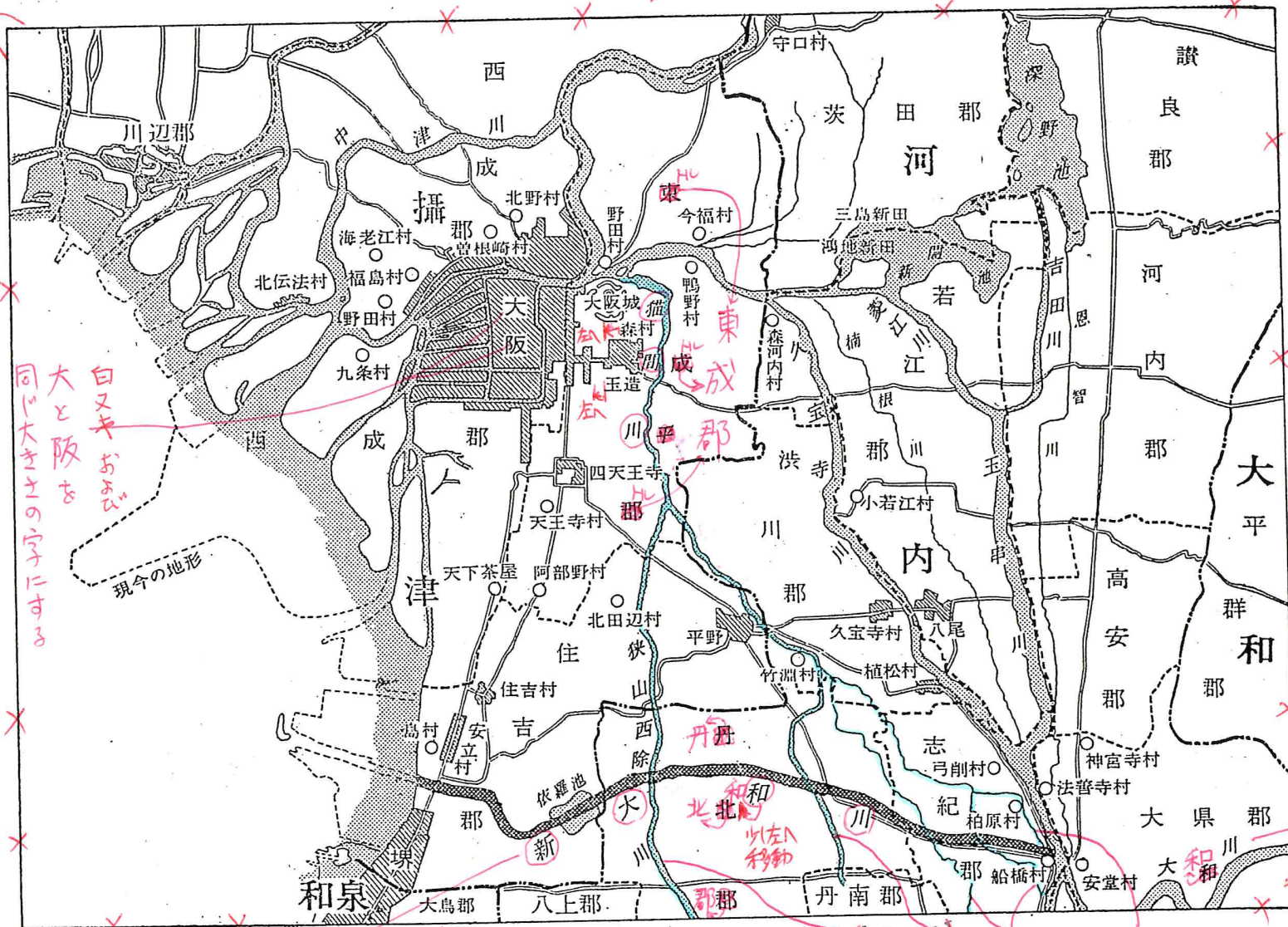
167

昭和44年9月1日発行

・右頁上半分に、おまに大きく掲載下さい。 2884^P-3/12

*猫間川を大きなゴチにして下さい。

枠
トル



白又キあふみ
大と阪を
同じ大きな字にする

現今の地形

大和川を
大きなゴチに
して下さい。

注釈有り

新大和川を
等間隔のゴチにする
太い

第369図 大和川つけかえ地図 (1904年)

『大阪府の歴史』 藤本篤 山川出版社、191頁参照

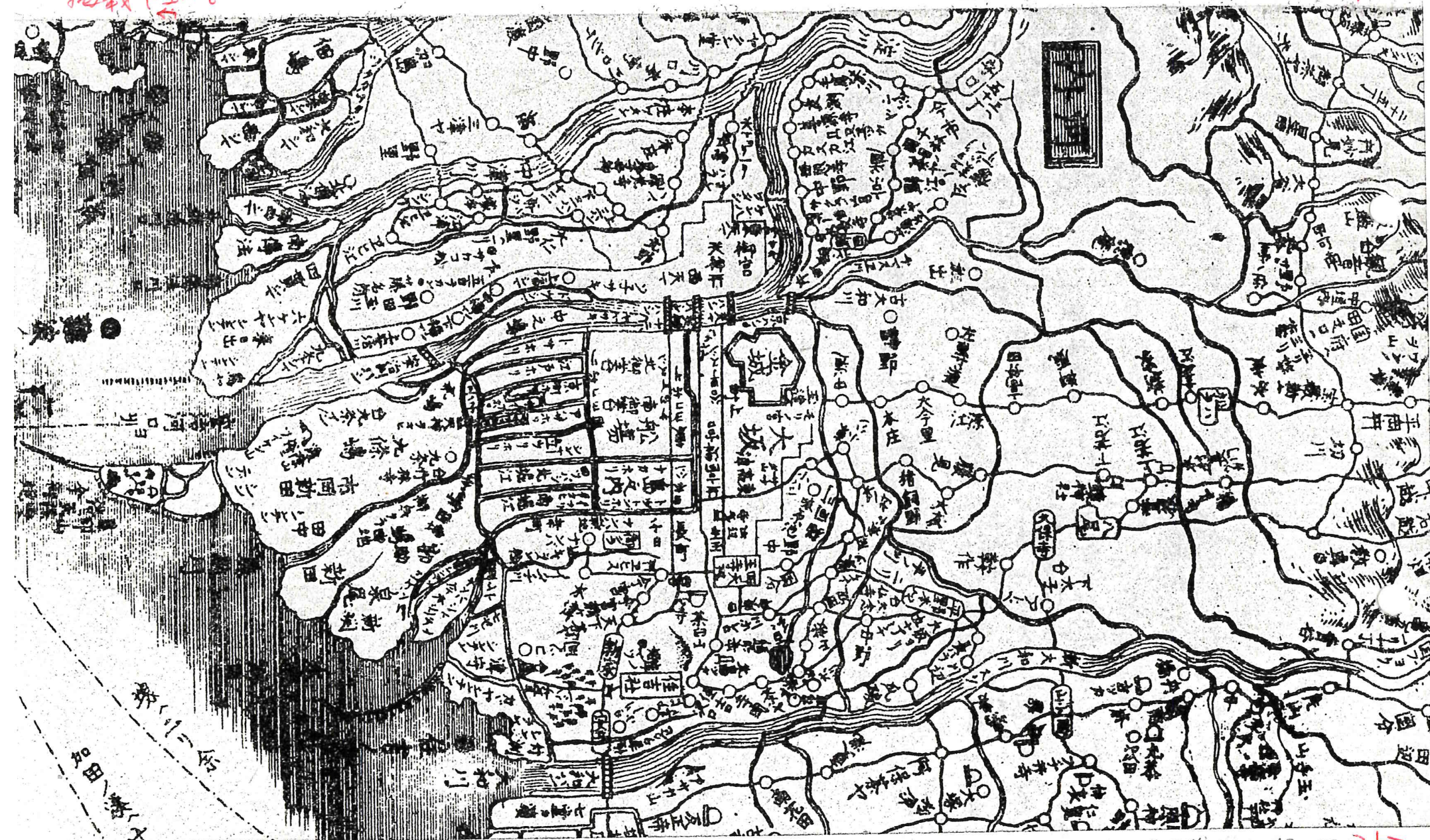
*平野川の下流域を、猫間川と呼ぶようになったのだろうか。

5つの川のみブルーで着色
黒線よりほみ出させてブルーを
塗して下さい。

168^P

・右項の下半分に、はみ出して、限定一杯大きく掲載下さい。

2,884 P. 4/12



カマ

1409 第370図

169P

120G

畿内路川掌覧図

(1866年)

慶応二年八月刻成 三都発行書林

〔江戸中期の大和川流路変更後まもない頃の図が〕

〔*カマ川と平野川とが〕

②8832 3/6 1704年ハ版

